

広報

こしがや

12月1日

昭和53年(1978) No.582

編集

越谷市役所企画部広報課

昭和53年8月5日第三種郵便物認可
毎月2回(1日・15日発行)



川魚料理教室

川柳公民館で



私が越谷に移住したのは、昭和十四年で、小学校六年生の時だった。東京の下町から来た私は、当時、白衣ボンヤシャツを着た上に、カスリの着物を着た男子生徒の服装が奇異に映つたものだった。

大袋村字大房——今の北越谷である。大袋小学校遠足は歩いて五分位だったが学区が大袋なので、子供の足で三分かかる大袋小学校まで下駄を引きずりながら隊列を組んで通学した。元荒川の水は澄み、春は梅と桜の花ではなまき、夏はかごうの立つ大林の桃の熟れた実を眺め、秋は蔓上の露がさざやかに見えた。冬の寒い日に、日溜りに一列並んで通学前の一時を過ごしたあの頃は、本当に牧歌的だった。

旧越ヶ谷・大沢という宿場を中心にして発達した越谷、生まれ育った人たちの心には、排他的な潛在意識も強かつたが、概して、善良純朴な人が多かった。

市民の一人ひとりが地場産業の振興と、地元小売業の育成に目を向けなければ、市民の暮らしはみじめになるばかりではなく、住み良い越谷は、だんだん遠くなる様な気がする。

それは、ツケは大きくなり決っている。地元の小売店に落ちた金は市税に入るが、本社を市外に持つ大型店を導入せても、少しも市の財政は潤わない。

11月23日、川柳公民館で川魚料理教室が開かれた。第1回は「なますを材料とした料理」。以後、どじょう、こいと計4回開かれる。川の多い越谷には川魚料理店がたくさんあり、こい、うなぎ、なますなどは「川の幸(さち)」。とでもいえようか。

江戸のむかし、上間久里に有名な「蒲焼所」があった。参勤交代の途次、秋田の佐竹公がきまって立ち寄り、うなぎ料理を賞味したという秋田屋(市郎右衛門)がその店である。上間久里は越ヶ谷宿と粕壁宿の中間にあり、旅人相手の休み茶屋がたいそう繁盛したところ、なかでもこのうなぎ料理は日光道中の名物であった。

写真は大沢秀夫氏撮影

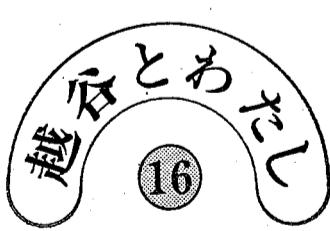
住みよい越谷は
果たして来るだらうか

越谷市町五二〇 赤荻平次郎

私が越谷に移住したのは、昭和十四年で、小学校六年生の時だった。東京の下町から来た私は、当時、白衣ボンヤシャツを着た上に、カスリの着物を着た男子生徒の服装が奇異に映つたものだった。

大袋村字大房——今の北越谷である。大袋小学校遠足は歩いて五分位だったが学区が大袋なので、子供の足で三三分かかる大袋小学校まで下駄を引いてながら隊列を組んで通学した。元荒川の水は澄み、春は梅と桜の花ではなまき、夏はかごうの立つ大林の桃の熟れた実を眺め、秋は蔓上の露がさざやかに見えた。冬の寒い日に、日溜りに一列並んで通学前の一時を過ごしたあの頃は、本当に牧歌的だった。

旧越ヶ谷・大沢という宿場を中心にして発達した越谷、生まれ育った人たちの心には、排他的な潜在意識も強かつたが、概して、善良純朴な人が多く、例え、10円安い品を買つたために、税金で100円の負担を余儀なされるとしたら、腹黒を見るのは市民であって、豪ぶのは特定の業者だけだ。金がないからといって他人の権利(ふんどし)で角力(すもう)をとれば、ツケは大きくなり決っている。地元の小売店に落ちた金は市税に入るが、本社を市外に持つ大型店を導入せても、少しも市の財政は潤わない。



「越谷と私」は、あなたのコナーです。みなさんの投稿をお待ちしています。字数は850字程度です。

越谷市の人口	
(昭和53年11月1日現在)	総人口 21万1177人
	男 10万6554人
	女 10万4623人
	世帯数 6万744世帯 114世帯増

前月比
358人増
197人増
161人増

